



第1章 古代との出会い

—殿塚・姫塚古墳の発掘—

合併によって芝山町が誕生した翌年の昭和31年、初めての殿塚・姫塚古墳の発掘調査が行われました。芝山町とはにわを結びつけるきっかけともなった発掘調査は、どのような経緯で行われたものなのでしょうか。

発掘の始まり

殿塚・姫塚古墳の発掘は、芝山仁王尊の現住職・濱名徳永さんが、昭和26年に仁王尊へ転住したことに始まります。「僧侶は死者との対話だけでなく、生きていく人々のために何かすべきではないか」と考えていた濱名さんは、寺の文化事業として古墳の発掘調査を行いたいと考えました。

濱名さんが母校大正大学に相談したところ、紹介されたのが早稲田大学の教授・滝口宏さんでした。この2人の出会いが、殿塚・姫塚古墳の発掘へとつながっていくことになりました。

地域総出の発掘調査

昭和30年10月以降、慎重に打ち合わせを重ね、調査の基本方針が作られました。方針の中では、地域の人々に古墳の価値を知ってもらうこと、また地元に残存館を整備し資料を保管することなどが挙げられました。

発掘調査が開始されたのは昭和31年3月27日。発掘には地元消防団、青年団、婦人会など多くの人々が駆けつけました。集まった住民は調査を手伝った

り、湯茶の接待を行ったり、見学者が乗ってきた自転車の整理をしたりと、一致団結して調査をサポートしました。また芝山仁王尊では調査する学生のために客殿を開放し、町内はじめ近隣の中高生が多く調査に関わりました。滝口教授は「町の方々が、自転車がクワ、シャベルをつけて何人も何人も先を急いで行く姿に、地区の方々の熱意を感じた」と語っています。

多くの成果

このように地域住民の支援を受けた発掘調査は、大きな成果をあげました。特に姫塚古墳で発掘されたにはわは、当時の状態のまま行列を組んだ状態で見つかかり、学術上貴重な発見となりました。その後、調査の基本方針で定められたとおり博物館が芝山仁王尊に建てられ、貴重なにはわが展示されることになりました。現在では殿塚・姫塚古墳が国指定史跡、はにわ9点が千葉県指定有形文化財に指定されています。

こうして行われた発掘調査によって、「芝山町とはにわ」の歴史がスタートすることになるのです。



右：学生にはにわを説明する滝口教授（中央）
上：昭和30年代の殿塚・姫塚古墳
下：出土した馬子のはにわ



はにわ祭と殿塚・姫塚古墳

昭和41年、国は成田市三里塚に新たな空港の建設を閣議決定しました。芝山町の住民は空港建設を巡って対立し、町内は大きく混乱しました。

この状況を憂慮した元町議会議員の伊藤高夫さんは殿塚・姫塚古墳に注目し、古墳時代の服装を再現することで観光客を呼び、また住民には古代の芝山地域を知ることと自信と誇りを持つてもらいたいと考えました。服飾研究家の協力を得て製作された古墳時代の衣装は、昭和56年の芝山仁王尊豆まきで披露され、大きな反響がありました。

同年9月には町民有志によって「農業文化博覧会企画推進委員会」が開かれ、古代衣装の行列を行って芝山の古代文化を全国にPRすることを目標としました。この祭りは翌年に「はに



上：第1回はにわ祭の様子
下：第1回はにわ祭のポスター

わ祭」という名称に決定し、監修を滝口教授に依頼。厳しい大自然の中、心豊かに力を合わせて生きていた古代人を見直し、人のつながりを取り戻し町の活性化と融和を目指すというメッセージを国造が託宣として伝えることにしました。

このように進められたはにわ祭は昭和57年10月31日、記念すべき第1回目が開催されました。それから34年たった現在でもなお、町民の融和と観光に寄与しています。